

「武庫川国文」第九十三号 抜刷
令和四年十月二十日 発行

歌仙堂広岡成明「文久三年道中記」
住吉社の社人家の文雅

管

宗次

歌仙堂広岡成明「文久三年道中記」

住吉社の社人家の文雅

一、はじめに

本稿は、先に「近世期津守家の歌道 津守国礼と柿葉齋喜始」として、女帝の後桜町天皇を中心とする閑院宮典仁、閑院宮美仁の歌会や歌道伝授活動の末端を歌書の書写収集によって支えた住吉社の神官家津守家と、その配下の社人家広岡家の活動の一斑をまとめたものの補遺にあたる。^①

寛政元年の「尊号一件」で、朝廷の権威維持に努めて、御所伝授をはじめとしての宮中雲上の歌道充実に頗る熱心な後桜町天皇は歌才にも恵まれていた。いにしえの南朝の忠臣としての誇りを護持していた津守家は日野家とは縁戚であり、古今伝授の伝承者としての閑院宮典仁親王が日野資矩に歌道指導に直接あたるために、和歌の神に仕える津守家は、官位を越えて多くの歌書や歌論書に触れる機会や縁故があった。

歌仙堂との堂号をもって、経済的にもかなりゆとりがあった広岡家は、住吉社の社人のようで、津守家を通じて、様々な歌書、歌論書を転書している。

地下堂上の歌人は、国学者の出版された著書は書林にならび、本

管 宗 次

屋で写本の依頼さえすれば、いとも容易にそれらは入手出来たが、堂上派歌書、歌論書は堂上歌学の常として上梓されることも、書林の商品となることもなく、一冊ずつに学ぶ本人の転写に学びの実があたり、書籍の価値もあった。広岡喜始が写した膨大な日野家の歌論書、後桜町天皇の歌論書を、次代の広岡成明が、「歌仙堂」の受け継ぐことは、歌学と歌書を継ぐこと同義であった。

歌仙堂広岡成明は、先代の広岡喜始の堂号の「歌仙堂」を継いだ。歌仙堂の堂号は、喜始からはじまるようである。歌仙堂広岡喜始は柿葉齋とも称し、好み短冊の料紙が柿樹の木目を模した美しいものである。詠えの料紙短冊で数寄の極みをしのばせる。広岡喜始は、津守国礼を「尊師」と呼び、津守国礼主催住吉社の月次歌会の行事運営の中心であったようである。

津守国礼が、和歌門人の広岡喜始に授与した和歌伝授書があつて、先にあげた「近世期津守家の歌道 津守国礼と柿葉齋喜始」のなかでも紹介したが、ここに、改めてあげる。

大綱五箇條

道以崇敬為本事

實一字貫古今事

観念踏酌事

一字一句不在疎略事

心高者難成道事

右者

日野一位資枝卿

御教訓也依歌道

習練伝申于喜始才子

畢

文化二年秋

正四位下津守国礼

(花押)

吉田豊氏の「中世の住吉社―氏族と職役―」^②に、例えば、住吉社神職「侍家」の「沼間氏」は、「特定の神役はなかったが、時々、に個々の人物が担った職掌や、他の朔幣・御供経宮家との比較などからいって、それほど低い家柄ではなかったものと思われる。」と、されているが、「喜始歌集」をみると渡辺家とともに最も親しい武家方からの神職家で、いわゆる「社人」の一族で、広岡喜始の次代が、広岡成明で、喜始は津守家七十二代津守国礼に学び、喜始の次代の広岡成明が津守家七十三代津守国福に学び、広岡家の堂号「歌仙堂」を継ぐ。広岡喜始の紀行文や連歌の文芸資料も次のようなものがある。

『歌仙堂喜始 南河内紀行』^③また、武庫川女子大学附属図書館蔵の滋岡文庫の一枚刷物「天保十五年三月五日於歌仙堂 尚齒喫茶会

前席之連歌」は、広岡喜始私家版の刷物で、天満宮の滋岡家にも配られた刷物というのも興味深い。「尚齒喫茶会前席之連歌」とあれば、参座構成人員の社会的関係や喫茶会会場との関係もあるのであろう。

二、歌仙堂広岡成明道中記

ここに、あげる歌仙堂広岡成明の道中記は、巻紙一紙に成明自筆で書かれたもので（巻紙を二紙に裁断、懐紙様に改装）、屏風からの「マクリ」の状態になっていた。

文久三年七月十六日に旅立ち、道中記は「文久三癸亥七月二十二日 歌仙堂広岡成明」と締めくくっている。津守国福から、「ちぬのうらのみるめ」を拾ってくるようにと下命を受けて、現地に出かける話だが、採集した「みるめ」干して京の日野家が閑院宮に、和歌の故地、歌枕に関わるものとして恭しく献上品とされた。

広岡成明は、旅情を楽しんで、中秋の名月にあててでかけたが、まだ蒸し暑さが残るようであった。それでも、海辺の月はすばらしく、瓢の酒を茶店で温めさせたりしている。

当時、時事を反映して大砲の「彦根侯守護し給ふ」「台場」が築かれており、「台場に大筒大砲の車の上よりさしのほるもいとめつらし」と、現在の淡路明石大橋の本州側に当時の砲台を模した公園になっている所は、位置に多少のずれもあろうが当時をしのばせる。「台場」は彦根井伊家「千駄崎御台場」「安房崎御台場」があったが瀬戸内海にもあった。

住吉社の浜辺とは、風景風物は異なり、住吉社からの明治天皇へ

の献上品は「蛤」であつた。西国街道沿いの敏馬神社が、万葉集の柿本人麻呂の

玉藻刈る敏馬を過ぎて夏草の野崎の崎へ舟近づきぬ

などで、「玉藻刈る」「みぬめ」などから、歌枕の地ととらえる歌人も近世期にはいた。

広岡成明と津守国福とは、身分にこそ差はあつたが、代々の当主が和歌を通じて互いに気脈の通じた住吉社の歴代歌人でもあつたといえよう。

「歌仙堂広岡成明 道中記」翻刻

津守従三位国福卿よりちぬの

うらのみるめをひろひてよとの仰

ことありけるに文月十六日ふと

思ひたちて七ツの頃よりやとを立

いて、妻めしつかふ女とも男をもるて

わりこ瓢をたつさへさつさくうらは

にいづるにはや日西の山のはに

かたふきぬ茶店にいひふくめ

てしきものなとりいつるうち暮

やしぬまにとりあへすうみへ

にいてみるに此わたりには

四になして磯辺をたとるに

いと鮮なるをひろひ得たりきのふにもや

あかりけんけさもやうちよせけん

思ふはかりなれはうれしくて

吹すさむあとよりひろふちぬのうらや

さやかにみゆれ磯のみるめは

ひろひて魚市場にいつるはや

暮てみえず成にければ磯辺を

つ、ひろひなからもとの茶店に

かへりわりこ瓢をとりいて、酒あた、め

さすやかて月東の台場に大筒

ならへて彦根侯守護し給ふ

大砲の車の上よりさしのほるも

いとめつらし

暮る、までみるめひろひてかへるさに

月をうかふるうらのさかつき

沖より入来る船の帆白く月かけてらせる

ま、にちかつくなとよるのうな原

波しろくみゆるもまたいとよしうみへを

たとりくくてあくるま、夜つゆをうけ

またの日砂などをあらひきよめて

塩をきりて津守卿へ献するとて

都よりのもとめと承りければ

ことのはの玉ぞか、れるちぬのうらの

みるめにそふるもくす斗りに

国福卿

あめふれは残るあつさもわすれ貝

拾ふ海へに雲そまよへる

とよみて賜りけるをかしこまりにたへすなから

送りこすいつこの海の雲ならん

夕立きろふ雨のはれまに

ととりあへすよみて奉りけるをしるして

津守卿のおほんかへりことのたふかみに

そゆるになん

文久三癸亥七月二十一日歌仙堂 広岡成明

注

①管宗次著『京大坂の文人 続々』上方文庫33・2008年4月30日刊、1頁～27頁。

②『住吉社さん―社宝と信仰―』大阪市立博物館、昭和六十年四月二十八日～六月九日、第十一回特別展・『住吉社―歌枕の世界―』堺市博物館、昭和五十九年・吉田豊「中世の住吉社―氏族と職役―」昭和六十一年三月三十一日刊、「館報V堺市博物館」

③『歌仙堂喜始 南河内紀行』幕末明治文芸資料13、平成14年12月25日刊、武庫川女子大学文学部日本語日本文学科管研究室

補記

令和四年七月二十六日～九月一日

彦根城博物館 テーマ展シリーズ「直弼発見！」巻の2

「開国の時代と彦根藩」には彦根藩台場の展示資料があった。

(すが・しゅうじ 本学教授)